

国際協力特別賞

おたがいを認め合う事

豊見城市立長嶺中学校 1年

古波蔵 笑美

世界で大きな問題の一つとして取り上げられている「人種差別」。人間を肌の色や人種などといった事で、嫌がらせなどの差別をする事だ。差別の中では、アフリカ系の人達を奴隷とする黒人差別が一番多く、何十年、何百年と経った今でも苦しむ人は減らない。なぜ、同じ人間で同じ地球に住んでいるのに、差別を繰り返しているのか。この問題は、世界中で問われている。だが、人種どうしの和解や協調、経済格差を見直しても差別はなくなる。その原因は、一人一人が差別について考えていないからだ。私は、小学5年生の時に「人種差別」について経験し、差別というものを深く学んだ。それは、小学校にアメリカから転校生が来た事から始まった。その転校生は明るく、誰とでも仲良くしてくれ、周りからの信頼も厚かった。だが、嬉しかったり、楽しかったりするとハグをする事から、あまり好かれなくなってきた。アメリカでは、ごく普通な事で当たり前としてやってきた事かもしれない。しかし、ハグで感情を表す事に慣れない私達は、どう返したらいいのかわからなかった。

そんな暗い日々が続いていたある日、道徳の授業で、クラス全員の長所を見つける学習があった。みんなで順番に、一人一人の長所を出し合った。しかし、転校生の長所を見つける番になると、明るかった教室は、一瞬で静まり返ってしまった。私は、必死でこの空気を明るくしようと思い、手を挙げようとした。しかし、なかなか手は挙がらず、心の中で迷うばかりであった。ちょうどその時、一人の男子が

「誰にでも関係なく、ハグしてくれる事」

そう叫んだ。すると、教室は何もなかったように明るくなり、

「明るい所。」「相手を気づかってくれる所。」などとたくさんの長所が挙がった。その後、クラス全員で笑った。私は、この事から、一人一人、誰もマネする事ができない個性を持っていると気づいた。その子にとっては、当たり前だったハグ。しかし、私達にとっては、誰もマネする事ができない特技だった。どんな事でも人をバカにはしてはいけない。そうハグは伝えていたと思う。人間は、生きる代表として、地球の代表として生まれてきた。だから、この地球に住む人間で、差別されるような人は一人もいないのだ。みんな仲間であり、一つの家族だ。世界中の人達と手をつなぎ、心をつなごうではないか。それが、差別という壁をなくし、おたがいを認め合う一番の近道だと思う。この経験を生かし、世界で差別され続けている人を私達の手で救いたい。それが、未来の地球のために私達、一人一人にできる事だと思う。